

## 断章

「ザイシャ……?」

「ザイシャだ」

「……………君、僕をからかってやしないよね?」

あ、『月霽箱』の位置を聞いてるとかそういうウィットに飛んだジョークじゃないからね、と  
帚木が付け加えると「そうか……」とグロースはどこか残念そうに顔を背ける。

やっぱりかー、とちよつと呆れながらワイングラスを弾いて次のワインの首を切り落とした  
帚木はテーブルの上に積もったツマミの残骸を『胡乱』に放り込むと、心底残念そうに溜息を  
ついたグロースの目の前——つまりテーブルの上に——尻を乗せた。

「でえ、そのザイシャくん? は、君の作り話や脚色じゃなくて実在したわけかい?」

「私がお前に嘘をついたことがあったか?」

「ないねえ。いつでも本当のことを言うのが君の役割。嘘をつくのは僕の役割だ」

でもさあ、と帚木は続ける。

「いや、ほら。君結構ジョークの類好きだし、よく使うだろ? だから確証ないなあって」

「だがこれについては」

「さっきだってえ、質問をジョークに持ち込もうとしたしい? やっぱ僕も思うところは——」

「……………」

(あつ、やばあ。本気で傷ついてるわあこれえ)

急激に覇気を失ったグロースは捨てられた子犬のような様相を醸し出す。

「そうだ、な……。すまない、帚木。今日はここまでにしよう。話の続きは日を改めて——」

「ああ帰らないで帰らないで! ごめんよお僕が悪かったからさあ! 信じる信じる! 君の

言うようにザイシャくんはいたんだね! いやあすごいねえ偶然の一致なのかなあ!」

覇気どころかクロニクを残して『月霽箱』に戻ろうとするグロースを慌てて引き止めると、  
グロースは扉の隙間からおっかなびっくり覗き込むようにほんの少し彼の気配を覗かせる。

「……………本当にそう思っているのか?」

「僕が君に嘘ついたことあるかい?」

「……………嘘をつくのが役割だとさっき言った」

「——あつたね! あつ、そうだあれだ。さっきのが嘘だったということだよお。ね? ね?」

「……………嘘をつくのが役割だとさっき言った」

「もー! たまに拗ねるのほんつつつと面倒くさくて可愛いなあ君はあ!」

……………結局、グロースの機嫌を取り戻して話を再開するまでに十分ほど掛かった。

## 第二節 雪仔 / Zajtša

雪仔<sup>ザイト</sup>という言葉がある。

それが後の世にアルビノと呼ばれるものであることはボルチェイブしか知らないことだが、少なくともこの時代のこの周辺地域においてはそう呼ばれ、信じられていた。

彼らは雪の精の取替<sup>チェンシリンク</sup>子であり、雪のように白く美しいが雪のように脆く、常人より死に近い。故に人の子ではなく雪の仔として、人らしい扱いを受けないことも度々どころではなくあった。

ザイシャもまた雪仔だ。であるからには家督の継承が適う対象からは外れてしまっている。だというのにザイシャが次代の当主へ選ばれたことが彼らの諍いの元となったのだろうと老人は推測していたが、食後に訊ねてみれば果たしてその通りであった。

老人の三食分の食事をべろりと平らげたザイシャが言うにはアンデイライリーの家には他に数人の子供がいたらしい。ザイシャは彼らと血が繋がっておらず、先代当主のレグゼが拾った捨て子であったという。

先ほど、雪仔の話が出たが、雪仔に纏わる風習として雪送りというものがある。雪の降る日に雪の精に仔を返すと、本当の子供がお腹の中に帰ってくるといふまじないだ。おそらくは、ザイシャも雪送りで捨てられていた雪仔だったのだろう。

……道理で嬉しそうに名乗ったわけだ。

名前も雪仔そのままの子だ。アンデイライリーの家で育てられていたのだろうが、育てられただけ。名前らしい名前を付けて貰っていないことからアンデイライリー家でのザイシャの扱いは見て取れる。そんなザイシャがレグゼに子と認められ、それどころか正答な後継として選ばれ、父が背負った物の次の担い手を任された。その喜びは推して知るべしというものだ。

『しかし、そのレグゼという男は愚かですね。雪仔に家督を渡すことが周囲にどれほどの波紋を生み出すか程度、容易に算出できるでしょうに』

話を終えた時にクロニクが冷ややかな声で呟いた。

すると、ザイシャは雪のように白い顔をサツと紅潮させた。

「レグゼ様を悪く言うな！ 確かに、レグゼさ——父もそれを心配していた。だが、きっと皆納得してくれると信じておられたんだ。悪いのは私だ。父が亡くなったときに刻印がないこと皆に知られ、うまく弁明できなかった。私さえしっかりしていれば父の遺志は叶えられたはずなんだ！」

『そんなわけがないでしょう。やはりレグゼとやらは愚か者です。雪仔に継がせることが既に間違いだと言うのにそれすら気づかないとは』

「礼装のくせに！ 命なき貴殿に父の何がわかる！」

『少なくとも家督を継がせることが雪仔の命を更に脆くするのも知らぬ愚鈍だとは』

「——言わせておけばア！」

「はいはいストップストップ！ じゃない止まって！ 一旦落ち着いてくれ！」

ボルチェイブはヒートアップする二人の間に慌てて割って入る。

「し、しかしロオスト殿」

「レグゼへの非礼は私がクロニクの分まで謝ろう。悪かった。君の父は立派な人物だ。君のことも、そして親族のことも心の底から信頼していたのだろう。もしも、不幸が訪れなければ、きっと彼の言うようにみんなが納得できた道があったに違いないだろう」

「う、うう……」

深々と頭を下げるボルチェイブの姿にザイシヤは勢いを削がれ言葉を失う。

『まったく、お父様に助けられたくせに頭まで下げさせるとは良いご身分ですね』

「君もダクロニク。君の強情は知っているから謝れとは言わないがこれ以上波立たせるんじゃない。私の小屋は君の『月雲箱』と違って狭いんだ。穴でも空いたら修繕は老骨に堪えるよ」

『……………』

頭を下げたままのボルチェイブが『月雲箱』に向かって非難の視線を飛ばすと、クロニクはふつつりと黙り込んだ。

「君の気が済むまで頭を下げよう。どうか、クロニクのことを許してやってくれ」

「わ、わかった！ わかったから頭をあげてくれロオスト殿！ 私も貴殿に助けられた身分。そんな私が貴殿に頭を下げさせるなど耐えられない！」

やっと頭を持ち上げたグロースは、しかし、苦々しげに口を開く。

「……………こんな卑怯なことをしてすまないねザイシヤ」

「いや。いいんだ。それに礼装程度の言うことに目くらまを立ってた私も悪いんだ。ああ、そうだと。礼装の妄言など気にするだけ無駄だと言うのに」

『……………感情の変数に算出結果を混乱させられている雪仔の言えたことですか？』

あ、と声が出る間すらもなくザイシヤの煽りにクロニクが買って出る。

ボルチェイブは一瞬、ザイシヤと姿すら見えないクロニクとの間にバチバチとスパークするものを幻視した。

「……………礼装風情が」

『……………雪仔の分際で』

「ふんっ！」

『…………ハッ』

互いに吐き捨てるように言葉を投げたその裏で、ボルチェイブは明日の朝食はどうしようかなどと諦め混じりの現実逃避を始めていた。

「これで全員かな？」

翌朝、太陽が登るとともにクロニクに起こされたボルチェイブは、昨日血を抜き取った死体をザイシヤに見せた。追手に放った呪歌は、例え魔術師であろうとも確実に滅ぼすほどのものだったが呪い除けの結界を越えて退避していたのなら関係ない。故に、始末できたかの確認をザイシヤにさせることが必要だったのだ。

「……………ああ。父の弟のクルガ様に、長兄のレアヌ様と、弟のグキロア様、ソルゾ様。そして、クルガ様の妻のコワリ様。これで追手は全てだ」

意外なことにザイシヤは死体を見てもさほどショックを受けてはいなかった。かといって、恨んでいた相手が死んだことへの喜びの表情も無い。それを不思議に思っているボルチェイブに気がついたのか、ザイシヤは曖昧に笑った。

「ロオスト殿の森に魔術師が入れば殺されると父に教わっていたので。私も死に体だったし、せめて道連れにして皆で父の顔を見に行こうという思いからここに逃げて来たのだよ。彼らが死んだことはわかりきっていた。むしろ、逆に何故私が生きているかわからないくらいさ」

「心外だなあ。私がまるで見境のない怪物のように言われているとはね」

傷ついたような顔をボルチェイブがしてみせると冷ややかな声がパスから流れる。

『事実、二百年ほど前は害意と魔術師という条件が揃えば端から呪殺していたのでは？』

「いやあ、それはさあ。一応ここも工房だしね。魔術師なら覚悟はできてるだろうって……………」  
それに、流れ者の魔術師なんてろくなものじゃないんだから……………」

『徹夜明けの魔術師の血は最高だ！ もう一杯！ と、お父様が口にした際の記録は私の中に音声データごと残っていますよ。再生しますか？』

「ごめん。昔の私が見境なかった。だからやめてくれ」

『了解しました。それと、そろそろ朝食が出来ます。別に雪仔に伝える必要はありませんが』  
ぷつりと念話が切れる。ボルチェイブはやれやれと肩をすくめた。

「どうされたのだロオスト殿？」

「朝食が出来たってさ。……………あー、死体を見た後だけど食べられそうかい？」

「私も魔術師の端くれだから平気だ。ご相伴に預かる。……………だが、」

ザイシヤは、アンデイルイリーの人々だったものをじっと見つめて、

「ロオスト殿、朝食の後に手伝って貰ってもいいだろうか？ せめて彼らを埋めてやりたい」

「わかった。でも老人だから力仕事にはあまり期待しないでくれ」

「恩に着る」

短い返事。その裏からほんの少しの憂いが漏れる。

ボルチェイブはザイシヤを残して、先に朝食の香り漂う小屋へと戻っていく。

老人が扉を閉めた後も、しばらくザイシヤは彼らを見つめていた。

本当の家族になりたかった、そんな呟きが聞こえたような気がした。

□□

「さて、それではこれからの話をしようか」

アンディライリー家の面々を獣の掘り出さないように魔術的に処理し埋葬した頃には夜闇がその帳を下ろそうとしていた。くたくたになったザイシヤは夕食を平らげてしまうと、やっとひと心地ついたのか食後の薬湯を飲みながら微睡みかけていた。

起こすのは可哀想な気もしたが、このことを告げるのは早ければ早いほどいい。

その肩を何度か叩くと、ザイシヤはハッとしたように飛び上がって恥ずかしそうに俯いた。

「そ、それで、これからの話というのは？」

「そのままの意味だよ。これから君が何をどうするか決めようということだ」

「なるほど」

ザイシヤはコクコクと頷くとその赤い瞳でボルチェイブを見上げた。

「確かに、いつまでもロオスト殿に世話になるわけにも行かないだろう。怪我も治ってきたがあと数日だけ大事を取って滞在させて欲しい。どうも、さっき穴を掘ったときに無理をしすぎたようで傷が少し開いてしまった。その後は村に戻って父の仕事を引き継ぐつもりだ」

途端、あっちゃーとボルチェイブは顔を覆う。

「あー……やっぱりかー……」

『予測が当たりましたね』

そんな二人の様子にザイシヤは、自分がなにか間違えているだろうかと首を傾げる。

「……………？ ああ、もちろん謝礼はする。貰ってばかりで終わらせるつもりはない。だが、あと数年だけ待ってくれ。私がアンディライリーとして職務を全うするまで父の遺した財産を使う権利はないと思うのだ」

「いや、謝礼とかそういう問題ではなくてね」

どう言えばザイシヤを傷つけないだろうと老魔術師が頭のなかで思索を組み替え続けていると、面倒そうなクロニクの声がそれを遮った。

『……まどろっこしい。単刀直入に言いますよう雪仔。あなたは村に帰れません』

「……………へ？」

ザイシヤはクロニクの言葉の意味がわからないようでコテリと首を倒したまま固まっている。そんなザイシヤの様子に呆れ果てたように嘆息したクロニクは、冷たい声で滔々と事実を並べ始めた。

『いいですか？ 第一にれっきとした事実としてあなたの村は滅びます』

「ふえっ！？」

素っ頓狂な声を上げ、ザイシヤが立ち上がった。

「な、なぜだ！？」

『決まっています。あなたの父、レグゼが死んだからです。魔術師のいる村は栄えます、しかし、それは魔術師がいるからこそその繁栄。彼を失った今、次の冬は越せないでしょう』

「だが、私がその後を——」

『愚問ですよ雪仔。では、こちらから問いますがあなたは何度の春を過ごしましたか？』

「……十回だ。それがどうかしたのか？」

『安心しました。その矮躯で十八の春を越えたなどと冗談のようなことを言われたらどうしようかと思っていましたので』

「~~~~~!!!!」

顔を真赤にしてテーブルを叩くザイシヤ。

クロニクは鼻で笑うような声でそれに答えた。

『続けます。十の春ということは生まれた頃から魔術師として育てられていたとしても未熟。確かに、あなたには素晴らしい才能があるのでしよう。レグゼが後継に選んだのも魔術師として大成するとわかったからでしょう。ですが、それはレグゼが生きてあなたを育て上げた時の話。今のあなた一人の力では到底村を支えることなど出来ません。せいぜい揃って餓死するか、その前に村人の恨みを買って八つ裂きにされるのがオチです』

「……ロ、ロオスト殿！ この礼装の言っていることは」

今度は顔を真っ青にしたザイシヤがボルチェイブの名を呼ぶ。ぶるぶると震える身体は例え暖炉に当たっていても凍えているだろう。否定してはしなかったのはわかっていた、が、それもボルチェイブは非情に徹しゆつくりと首を振った。

「——私が、私がアンデイライリーを継いだからなのか？ そうでなければ村の皆は」

『安心しなさい雪仔。断りも無く魔術師の領域に踏み入れ、対策もなしにお父様の呪歌を受けた時点でどのアンデイライリーも愚劣です。他の兄弟を選んだのではなく幼いあなたを後継としたのがその証左の一つ。例えあなた以外がアンデイライリーを継いでも遠からず村は滅びていたことでしょう。簡潔に言えば、あなたの村はレグゼが死んだ時点で終わっていたのです』

「そんな……な……」

へなへたとザイシヤは床に座り込む。

『責務とは選択することが出来る者だけに付随します。あなたは滅びを招く以外には選択肢が与えられていなかった。ならば、無力なあなたに責を負う義務も資格もありません』

「クロニク」

『おや、これでも慰めているつもりだったのですが？』

ボルチェイブが咎めると、クロニクは白々しく返した。

力なく落ちたザイシヤの肩にボルチェイブはそっと手を置く。

「……帰るところが見つからないのならばらくこいで暮らすといい。君が望むならレグゼの代わりに私が魔術を教えてあげよう。一人前になるまでね。私は歌で君らアンデイライリーは

契約を基とするが、幸いにも基礎魔術の範疇でその辺りはカバーできる。ここを出て行くにしても、一人で生きていくのに十分な力を備えてでもいいんじゃないかな？ 私だって君くらいの子供を見捨てるほど人の心を忘れちゃあいないし君の食い扶持くらいならなんとかなる。なんだったら私の後を継いでこの村の魔術師に——」

「——少し、考えさせてください」

フラフラと立ち上がったザイシヤはベッドへ向かっておぼつかない足取りで向かっていく。

ゴソゴソとベッドに潜り込む音に続き、いくらかの啜り泣きのような声が漏れていたが、埋葬の疲れもあったのだろう、さほどもしないうちに寝息に変わった。

「急ぎすぎた、かな？」

ポリポリと老魔術師は頬を搔いた。

と、その時、

『あなたは卑怯者ですね。お父様』

パスを通じて『月筆箱』から念話が届いた。ボルチェイブもまた念話を送る。

「卑怯、とは？」

『私にとぼげる必要があるのですか？ 視えていたのでしょうか？ あの雪仔に会った時から、あなたの、その未来視の魔眼で』

——終点の未来視。

それはボルチェイブ・ロオストが生まれ持っていた限定的な未来視の魔眼。

物事の終点、つまり破滅・終焉だけを知覚する異形の未来視である。

ボルチェイブが森で追手の性質を識っていたのもザイシヤの数通りの破滅を視て、追手の正体を識ったことによるもの。そして、その中には勿論ザイシヤを助けることで破滅することになった村の未来も例外ではない。

そう。ボルチェイブが追手を皆殺しにしたのはザイシヤを助けるためではない。ザイシヤの帰る場所をなくし、選択肢を奪い、確実にこの老魔術師の元に留まらせるための行いだった。

「怒っているのかいクロニク？」

『いいえ。あなたの悲願と苦しみを知っている以上私から言えることはありません。なにより、冷たく当たってあなたの言を聞きやすいよう誘導した時点で私も同罪ですから』

ですが、と続ける。

『余りにもあの雪仔が哀れです。あなたの願う未来を叶えるために欲しかった未来へと繋がる要素を全て叩き潰されたのですから』

、本当の家族になりたかった、

ザイシヤの願った未来は老人の手で手折られた。

至る可能性はとてつもなく低かっただろう。それでも、まだ可能性はゼロでは無かったのだ。

人ならざる雪仔であったとしても、アンディライリーの面々と、村の人々と共に笑い、同じ目

線で慎ましくも平和に暮らす、そんな未来もあつたはずだった。

その道を閉ざしたのは紛れもなく、ボルチェイブとクロニクだ。

『雪仔はあなたの弟子になると言うでしょう。あなたの目論見どおりに。十の春しか迎えたことのない小娘が七百をゆうに超える老獪な化物に敵うはずありません。自分が既に選べなくなっていることにすら気が付かずに、自らの意思でここに残ることになる。そして、最後には喜んであなたの夢の後継いしずえとなるに違いありません。それで満足ですか？』

「……………これは業だよクロニク。私の罪だ。それでも、私にとつては最後のチャンスなんだ。私は、この魔眼で子供の頃から人類の破滅を視続けてきた。そして、それを跳ね除ける手段を確立した。後は時間だけ。未来に繋げるだけなんだ」

『だから雪仔には犠牲になって貰うと？』

「そうとも。傲慢だろうねえ。身勝手だろうねえ。——でも、それが私たち魔術師だ」

ランプを消す。暖炉に新たな薪を投げ入れ、安楽椅子にボルチェイブは腰を下ろす。

ギイ、ギイ、と椅子を漕ぐたびに響く軋みが夜の中に溶けていった。